



宮島大八書丹《故内閣総理大臣犬養公之碑》の書法 ： 執筆の背景と宮島大八の晩節

信廣, 友江

(Citation)

表現文化研究, 6(1):69-84

(Issue Date)

2006-11-13

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81002870>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002870>



宮島大八書丹《故内閣総理大臣犬養公之碑》の書法 — 執筆の背景と宮島大八の晩節

A Study of Miyajima Daihachi's Inscription of the *Monument of the Late Prime Minister Inukai Tsuyoshi*:
Backgrounds of Miyajima Daihachi's Writing and his Later Days

信廣友江 Tomoe Nobuhiro

概要

木堂犬養毅の顕彰碑《故内閣総理大臣犬養公之碑》(以下《犬養公碑》)は宮島大八の書丹になり、近代書道史上に確固とした存在位置を占めるものである。その書について、従来、「張裕釗直伝の書風による宮島晩年の最高傑作」とする評価が定着している。しかし、それは必ずしも事実を表しているとはいいがたい。本論は、《犬養公碑》の執筆背景を通してその書法を明らかにするとともに、これに投影された宮島晩年の書法理念をはかり、同碑に対する評価を再考しようとするものである。

宮島は《犬養公碑》撰文年の5年前に、《佐藤氏念祖碑》を書丹している。この二碑の書丹事情、執筆経過を比較検討すると、まず後者は、師張裕釗の篆意を含む独創的な書法と自らの書法とを融合させて書き上げた宮島の自信作であった。それに対し、《犬養公碑》は師法ではなく、最終的に自身が拠り所とした《九成宮醴泉銘》の書法に拘り続けたものである。宮島はこの碑文原本の作成に苦心し、完成までに数年を要した。その書は技法的には不備が大変多い。しかし、独自の風格を備えるものである。

宮島は最晩年における碑の書丹を、師法を突過した自らの書法理念によって表そうとした。しかし、既に宮島の体力と表現力はかつてと同じではなく、その実現のためには強烈な自己との格闘が展開されねばならなかった。それは師の箴言である「攻苦」の精神を貫き、「振俗」へと至ることでもあった。《犬養公碑》はまさに攻苦の末に表出し得た自己実現の書であり、超然たる渾穆の境地へ到達するものであったといえよう。

キーワード: 文字文化、書法、碑刻、宮島大八、張裕釗

Abstract

This paper reexamines the value of Miyajima Daihachi's works and discusses the change of his calligraphic philosophy, particularly focusing on the inscription of the *Monument of the Late Prime Minister Inukai Tsuyoshi*, which is allegedly the best of his later works. This paper sheds light on the significance of this work in his calligraphic career and reconsiders its value from a different point of view to previous studies.

This paper compares two of his works; the *Inukai Monument* and the *Sato Monument*, and concludes that the former is not as meticulous as reviewers might think. The *Sato Monument* followed the writing style of Miyajima's master Zhang Yuzhao, whereas the *Inukai Monument* adopted the writing style of *Stele on the Palace of Jiu Chengong* (*Jiuchenggong liquan ming*). Because of this stylistic difference, or this stylistic challenge, the *Inukai Monument* forced him to spend several years on this work. Although it left many technical flaws, it still has its own unique atmosphere.

Miyajima struggled to diverge from his master by devising his own writing style. The *Inukai Monument* is a reflection of his desire for originality.

Keywords: Character Culture, Calligraphy, Inscription, Miyajima Daihachi, Zhang Yuzhao

はじめに

岡山県岡山市川入に、5・15事件で凶弾に斃れた第29代内閣総理大臣犬養毅(号木堂・1855～1932)を顕彰する故内閣総理大臣犬養公之碑(以下《犬養公碑》と称す)がある。同碑はわが国近代書道史上に確固とした存在位置を占めるもので、宮島大八(号昂斎、字詠士・1867～1943)がこれを書丹している。宮島は数え年21歳にして单身渡清し、当代随一の古文家とうたわれ、また碑学派書法の泰斗であった張裕釗¹に学んでその書法を継承し、さらに独自の書境を開拓した。しかしながら、宮島はそもそも善隣書院の創設者であり、漢学と中国語を専門とする教育者であって書家というわけではなく、むしろこれを遠ざける隠者のごとき生き方を貫いた人物であった。それゆえ、宮島の書法あるいは書法理念が一般的に知られることは少なく、その真相が公にされることもなかった。このような状況下で、《犬養公碑》は1957(昭和32)年刊平凡社『書道全集』に取り上げられ、日比野丈夫により、「張廉卿直伝の書風で、やはり張廉卿を習った木堂の筆者として、きわめてふさわしい人を得た」もので、かつ「この碑は詠士晩年の最高傑作とされ、非常な苦心の結果なったものといわれる」と解説がなされた²。そして、これが以降における同碑の評価基準として定着し、通評となっている。しかし、この評は果たして当を得たものであろうか。ましてや、文の末尾は伝聞表現であり、その解説がどこまで事実を把握した上で評されたものか疑問を持たざるを得ない。

執筆者はかつて、《犬養公碑》を「詠士晩年の最高傑作」とすることに疑問を持ち、書丹原本の制作過程を追って、その再評価を試みた³。そして、《犬養公碑》の書は、老齡かつ病後の執筆であるため作品技量の点では最高傑作とは言いがたいが、「攻苦」「振俗」(後述)という、張裕釗より得た教えの深淵を貫こうとしたところに存在意義が認められるとの結論に達した。本稿はさらに検討を進め、先のいま一方の評にあった《犬養公碑》を「張廉卿直伝の書風」とする視点について、これ以前の宮島の書丹になる《佐藤氏念祖碑》との比較によってその妥当性を検証し、同碑に投影された宮島晩年の書法理念をはかろうとするものである。

1. 《犬養公碑》と宮島大八

1.1. 《犬養公碑》の概要と書法上の問題

第一次世界大戦後の日本は一段と軍国主義の度を強め、軍部にとって政権の掌握は必須の要件となって

いた。1932(昭和7)年5月15日、武装した海軍青年将校たちは決起し、首相官邸等を襲撃して護憲運動の旗頭であった犬養を射殺した。この事件を機に日本の政党政治は終わりを告げ、以後、わが国は軍事国家への道をひた走ることとなる。

犬養は清廉潔白で情に厚い政治家として多くの信頼を得た人物であり、生誕地である岡山県都窪郡吉備町(現岡山市)では、その死を悼んでいくつかの顕彰会が興された。《犬養公碑》は、その顕彰会の一つが1936(昭和11)年の五回忌を記念して建立したものである。同碑は犬養家旧宅から数十メートル離れた犬養家墓地敷地内にあり、自然石を積んだ碑台の上に、碑陽を旧宅の方向へ向けて立っている【図1】【図2】【図3】【図4】。現在は岡山県郷土文化財団の管理下に置かれ、直接には隣接する犬養木堂記念館により保護される。

碑の概要は次の通りである⁴。

- ・所在地 岡山県岡山市川入 犬養家墓地
- ・撰文者 松平康国
- ・書者 宮島大八
- ・刻者 山内国太郎
- ・撰文年 1936(昭和11)年10月
- ・建立 1941(昭和16)年11月3日(除幕)
- ・石質 花崗岩
- ・規格 高さ 最大高約240cm
幅 最大幅約165cm
奥行 約40cm
碑面 約142cm×105cm
- ・碑文 碑額 6行 1行2字 全12字 楷書 陽刻
本文 29行 1行37字 全867字

《犬養公碑》は立碑から60数年を経てなお碑面に大きな損傷はなく、周囲に堂々とした威風を放つ。一見したところ、文字刻面の状態も良好と思われる。しかし、長年屋外で風雨に晒された状態にあり、さらに石質に影響されたのか、近くで見れば文字の縁が全体に摩滅していることがわかる。同碑の書は大小の大きさの差が激しく、しかもその変異は放埒といえるほど不統一で、小字が無原則に集中する部分も少なくない。大字には縦2.7cm×横3.0cmの「総」等があるものの、小字には縦1.0cm×横0.5cmの「日」等があり、この小ささに摩滅が加わると、原跡の線質は推測するしかない状態となる。なぜこのように楷書碑の文字規格に

極端な差が生じているのか。さらに、五回忌の撰文から立碑までに5年が経過しているのはなぜであるのか。筆者の既出の小論は、その疑問を解きほぐすことから始めるものであったが、いま新たにこの書跡の中に宮島の自己書法に対する強靱な意志が存在していたことが解明された。これは宮島大八の書人詠士としての晩節をあらわすもので、そこに重大な論点を見出すものである。

1.2. 宮島大八の学書

宮島大八は1867(慶応3)年10月20日、米沢藩士宮島誠一郎の長子として出生した。名を吉美といい、昂斎、詠而帰廬主人と号す。また字を詠士とした。大八は通称である。宮島は11歳のとき勝海舟に入門し、14歳から清国公使何如璋の随員黄遵憲等に中国語を習い、15歳から興亜学校、翌年から外国語学校に在籍した。17歳のとき、誠一郎と懇意であった清国二代公使黎庶昌が誠一郎に贈った張裕釗の『濂亭文集』と詩幅を見て感動し、裕釗への入門を決意する。そして1887(明治20)年5月、清国に渡り、保定府蓮池書院主講をつとめる張裕釗を訪ねて入室の弟子となるのである。以来、裕釗が死去するまで、一時の帰国をはさみ、足かけ8年に及ぶ留学生活を送った。

張裕釗の指導法は親しく手を取って教えるのではなく、自ら工夫研究し、自ら会得するよう仕向けるものだった。入門当初に宮島から誠一郎に発信された次の書翰には、「攻苦」の箴言をもってした裕釗の指導方針が記されている。

又凡学問は攻苦の二字を最の専用となす。詩文を作るにても書を学ぶにても、易きより路に入るなく、難処より入るべし。方今の学者は皆易より路に入る故に、其文翻々、才に任せて作れ共、皆至る者あらず。故に才のなき人は文を書に筆洩りて思ふ如くならず。去れ共攻苦の上に攻苦を重ねて孜々として勉励する故、一旦は豁然として得所あり。確乎たる古文家なる者、古之人然り。故に攻苦は才を生ずる本なり云々⁵。

張裕釗は、決して安易な道から入るのではなく、難所から入って常に「苦を攻める」べきと説いていた。

裕釗は宮島に対し、書法においては北魏の碑刻《張猛龍碑》⁶を教材として与え、学習のための具体的なアドバイスを行うことは一切しなかった。宮島は苦心しな

がらまさに独習に近い形でこれを学びとることになる。実は、《張猛龍碑》は、張裕釗が学書の末に行きついた究極の古典だった。張裕釗自身ははじめに欧陽詢の書を、続いて米芾を学んで、最後に古法すなわち《張猛龍碑》に入ったとされる⁷。つまり、裕釗は難易度が高いことを自身が認める古典を入門教材として宮島に渡したのである。張裕釗は日々欠かさず習書をしたが、それは書法研究を目的とするものではなく、自己を見つめるため、自己の確信のために行うものであった。裕釗が宮島に知らしめようとしたものも、また単なる書技法ではなく、古法の真意とは何かという理念であった。それはたやすく学べる古典教材から得られるものではなかった。

宮島は師の教えをよく継いだ。1894(光緒20)年に張裕釗が死去したとき、長子沆、次子澹によって発せられた死亡報告書「哀啓」⁸には、「奉先嚴之学、惟謹於書法、所得尤多。先嚴書法遺緒、或將伝於海外耶。(先嚴の学を奉り、惟うに書法に慎みて得る所尤も多し。先嚴の書法の遺緒、或いは將に海外に伝わらんとするか)」と記されている。それは、宮島が張裕釗書法の継承者であることを認める記述であった。

張裕釗が死去したと同じ年、日清開戦となった。これにより、宮島は中国に留まることを潔しとせず、帰国の道を選ぶ。そして、翌年詠帰舎(3年後に善隣書院と改称)を開設し、以後、東京外国語学校講師等として教壇に立ちながら中国との善隣友好に心を砕き、名利を好まず、隠士また国士としての生き方を以てした。学書に関しても、裕釗が自らを見つめるために書したと同様に、宮島もまたその姿勢を崩さなかった。宮島の書は張裕釗書法の遵守に留まることなく、40歳代後半に裕釗の説く中鋒の本義に到達して後は、「骨格雄健、結構整正、極めて気品に富んだ」⁹自らの書格を確立していった。

1.3. 宮島大八と犬養毅

宮島の生き方にとって、犬養はどのような存在であったのだろう。犬養を顕彰する碑の執筆者を宮島がつとめたことには、何か特別な理由があったのだろうか。

宮島が《犬養公碑》の書丹をすることとなった正確な経緯はわかっていない。2006(平成18)年8月、犬養の碑を事実上管理している犬養木堂記念館¹⁰に問い合わせ、同館にて資料類の検索が行われたが、書丹依頼に関する記録は一切見つからなかった。また、立碑を企画した顕彰会の詳細についても不明の

ままであった。

書丹者選定の理由として巷間に流布するものに、宮島と犬養との間には、いずれか先に死んだ方の碑文を残った方が揮毫するという約束がなされていたとの話がよく挙げられる。これについても記録が残っているわけではない。しかし、宮島大八の令孫で、現当主の宮島吉亮氏によると、それは吉亮氏誕生以前より、宮島家では常識的な事実として普通に語られていたことであったという。果たして両者の交友はどのようなものであったのだろうか。

犬養毅は1855(安政2)年、備中国庭瀬村字川入(現地名は上記)に出生した。その名を当毅といったが、後に自ら毅と改めた。字は子遠、号を木堂とする。原姓は「犬飼」で、のちに「犬養」を常用した。犬養は政治家であると同時に文墨への関心が高く、書に対する造詣にも深いものがあつた。犬養は自らを「専門書家ではない」¹¹としながらも、書に対してひとかたならぬ見識を示し、『木堂翰墨談』¹²、「木堂書譚」¹³等に談話を残し、自身は張裕釗書法に私淑して、裕釗風の特異な書風を書いていた。

犬養は宮島と同様に中国通として知られ、その善隣友好に力を尽くした。中国要人との交友は幅広く、張裕釗書法に傾倒したのも、裕釗の書を好んだ鄭孝胥¹⁴よりその情報を得たことがきっかけであつた。また、犬養の庇護を受けて日本に亡命した康有為¹⁵の存在もその傾向を一層強くしたと考えられる。

康有為はその著『広芸舟双楫』¹⁶において張裕釗を激賞し、書法史上の最高位に位置づけている。康有為はまず、同書、「体変第四」の中で裕釗を鄧石如とともに今学¹⁷の先鋭者として掌握し、「卑唐第十二」においては鄧石如、包世臣に加えて千年の歴史を雄視する人物とした。そして、「余論第十九」で碑学の大成者との認識を示した上で、「述学第二十三」に裕釗の書について次のように述べる。

湖北有張孝廉裕釗廉卿、曾文正公弟子。其書高古渾穆、点画転折皆絶痕迹。而意態逋峭特甚、其神韻皆晋宋得意处。真能甄晋陶魏、孕宋梁而育齐隋。千年以来無与比。

湖北に張孝廉裕釗廉卿有り、曾文正公の弟子なり。其の書 高古渾穆にして、点画転折皆な痕跡を絶つ。而かも意態の逋峭なること特に甚にして、其の神韻は皆な晋宋の得意の処たり。真に能く晋

を甄り魏を陶し、宋梁を孕んで、而して齐隋を育す。千年以来、与に比する無し¹⁸。

つまり、張裕釗について、「晋魏から齐隋に至るまでのすべての書法が極められ、それぞれのよさが生かされている。そのすばらしさはこの千年以来比較するものがない」と評定したのである。漢学の素養の深い犬養が、康有為の論に注目をしないはずはなかった。

『広芸舟双楫』はその後邦訳され、『六朝書道論』¹⁹として刊行されたことから、わが国でも広く読まれることになる。同巻末の「六名家書談」には犬養の「局外観」と題した小論が収録されており、そこには裕釗を推賞する一文が掲げられている²⁰。1898(明治31)年、康有為は清末の戊戌政変の難を逃れて日本へ亡命し、このとき犬養はこれを助けて篤く遇した。両者の間には政治面のみならず、翰墨の交流が重ねられた。

しかし、康有為は張裕釗に会っていたわけではなかった。『広芸舟双楫』は裕釗の知遇を得ぬままに著したものだったのである。犬養が知り得た張裕釗の書法も、鄭孝胥により間接的に受け入れたものにすぎない。何より張裕釗自身が専門書家としての認識を有しておらず、自らを閉ざして交友を著しく狭くした人物であり、中国にあってもその書法の真髄を知る人は稀少だった。

従って、犬養にしてみれば、張裕釗に直接師事した宮島の存在はやはり特別なものであつた。何より、宮島を介すれば自らが「最高」とする書法を親しく学べるのである。「詠翁道話」²¹には、張裕釗書法に関する犬養の逸話が次のように記される。

嘗て犬養木堂が廉卿先生の執筆法を教えよと云ったから諾して置いた。その後木堂の揮毫する処を見て驚いた。即ち筆管の頭部を指に密着固執して捻筆などのことは全然なく、肩と肘とのみで書いていた。従って文字に飛動の姿勢は出るが、点画の微妙さは全く駄目である。これでは所詮説明しても無効と思ったのでやめにした……²²

宮島の言葉からは、犬養の書が実は裕釗の書法の外観を辿るにすぎないものであつたことが理解される。犬養は裕釗へ傾倒し、私淑はしたが、専門的に深く研究するまでの条件を持っていたわけではない。犬養にとって、書はあくまでも文人のならないに留まるものであつたのだろう。

中国事情に通じ、また張裕釗への関心という共有する視点を持つところから、宮島と犬養との間に接点があった。その間には碑文執筆の口約束をする機会があったかもしれない。とはいっても、二人は昵懇というほどではなかった。これに関する犬養木堂記念館による認識も、「犬養と宮島との交流は多少あった」という程度のものであった。

2. 《犬養公碑》の書丹過程

2.1. 《犬養公碑》の書丹年

《犬養公碑》の他に宮島が書丹した碑碣として知られるものには、次の5作がある。

- (1) 献砲弾碑 広島県廿日市市宮島町
1896(明治29)年 30歳
- (2) 医学博士橋本君碑(戦災により破壊解体)
東京都港区長谷寺
撰文1911(明治44)年2月 45歳
- (3) 高橋景羽墓表 岐阜県安八郡神戸村
撰文1921(大正10)年3月 55歳
- (4) 墮涙之碑 新潟県三島郡寺泊町
撰文1929(昭和4)年12月 63歳
- (5) 佐藤氏念祖碑 香川県香川市牟礼町
撰文1931(昭和6)年5月 65歳

* 各末尾は撰文また碑刻年における宮島の年齢

ほかに《二葉亭四迷墓表》、《根津先生碑》等が挙げられるが、詳細については今は不明である。

各碑の撰文年は碑文の中に記されているものであり、建碑の時期については明らかではない。撰文の後に揮毫をし、文字を刻し、立碑をするわけであるから、必ずしも碑文に示された年にそのすべてを完了しているとはいい切れず、書丹年が撰文年より下ることは十分にあり得ることである。では犬養公碑の場合はどうだろうか。

《犬養公碑》は1936(昭和11)年に撰文が行われ、1941(昭和16)年に建立された。その書丹年について、「詠士年譜」²³は撰文年と同じ1936(昭和11)年、宮島70歳の年とし、『書道全集』²⁴は1938(昭和13)年、同72歳の年とする。ところが、同じ1938(昭和13)年の4月初めに、門弟の富永が宮島宅において《犬養公碑》草稿が書棚に貼ってあるところを見ており、未だ執筆段階であることを明記している²⁵。従って、少なくとも撰文の年には碑文原本はまだ完成していないことになる。だが、

富永が下書きを見たという1938(昭和13)年から考えても、1941(昭和16)年11月の建立までは期間があきすぎる。しかも、そもそもこの建碑が犬養没後の五回忌(1936年)を記念した行事として計画されたものであれば、さらにその5年後に建碑を行うというのは不可解なところである。つまり、碑の建立除幕の時期は、実際には犬養の忌祭とは切り離し、宮島の碑文原本の完成を待って定められたのではないだろうか。

《犬養公碑》原本の完成時期を推定する材料として、宮島に宛てた山内国太郎の葉書がある。山内は石工本来の技術を守り抜こうとする昔気質の職人で、宮島は子貞の名と酔石堂の堂号を与えて厚い信頼を寄せ、《犬養公碑》の碑文刻者として選定していた。山内は東京から岡山へ赴いて刻字作業にあたった。この葉書は、刻了後、帰京の前に投函したもので、8月5日の日付が記載され、消印は「昭和16年8月5日」となっている。文面は次の通りである。なお、同葉書は、現在善隣書院に保管されている。

東京市渋谷区千駄ヶ谷五丁目八三七
宮島大八先生 御侍史
岡山県吉備町犬養内
山内国太郎 拝
八月五日

拝啓時下炎暑の砌に御座候処、先生には益々御健勝に被口渡候事と御祝辞申上候。扱而其後地方の人々より多数拓本を依頼され、思はず日子を経過致候も、昨日を以て終了仕候。二三日後に建上げを見て出発の予定に御座候。尤も出来得れば帰途伊勢来拝も致度念願に候間、数日後には帰京拝顔の榮を得る心組に有之候間、其節萬々可申上候。先は時候御見舞を兼御報知申上候。拝具。

山内の葉書には、本人が数多くの拓本をとったこと、2、3日後に碑の建上げが行われること、帰京後に宮島を訪ねること等の記載がある。これは、1987(昭和62)年に久米公が犬養家旧宅管理者の高木吉太郎取材して、「刻了後の数日間(国太郎は)タンポを打ち続けて数十葉の拓本を作って帰った」との話を得たことと内容が一致する²⁶。8月5日という葉書の日付から換算すると、山内は8月10日すぎには宮島邸を訪れたことだろう。先の富永は「詠翁道話」の同年8月23、4日の

項に、「犬養毅碑の碑銘拓本を先生から頂戴した」と記している。ここで富永が手にした拓本は、帰京した山内が宮島に贈ったうちの一葉だったと推定される。

では、山内はいつから刻字作業に入ったのだろうか。先の久米の取材では、刻字は「1日、精々7字ぐらい」の作業であったという。これを文字数から単純に逆算すると約150日を要することとなり、時期をあてはめると作業の始まりは3月頃との想定が可能である。《佐藤氏念祖碑》は1日4、5字²⁷、《医学博士橋本君碑》は1日数字²⁸を刻したというから、《犬養公碑》の場合も実際には7字までいかず、もう少し少なかったかもしれない。

善隣書院には刻字前の碑石の様子を伝える写真が伝存している【図5】。それを見ると、横たえられた碑石の周囲は、正面には板のようなものが立ち、ほかは細い柱様の棒が見える。おそらくは雨を避けるために屋根を取り付けた程度の、簡易の作業場をつくっていたのだろう。この状況から類推すれば、冬の寒気や冷気を気遣う必要のない季節、つまり先に想定した時期と同じく、3月頃の暖くなった季節から山内の仕事は始まったことが推測される。とすれば、原本は春の初めには完成していたことになる。それはまた、松平康国が記す撰文年月から約4年半が経過したことを示すものでもあった。

宮島は人に書を乞われて応ずる場合、精魂を尽くして書くために、多くの月日をかけることが常であったといい、《医学博士橋本君碑》書丹の際に、「岩井氏度々来訪督促、年を重ねて漸く清書が出来た」²⁹と原稿の催促を受けていたことを宮島自身が語っている。《犬養公碑》についても同様で、先の高木は、「建碑にあたって、その撰文は得たものの、宮島詠士に依頼した書がなかなか書き上がってこず、関係者をやきもきさせた」という話を伝えている³⁰。また、熱狂的な宮島信奉者として知られる元山形市長大久保伝蔵がまだ若かった頃、こうした地元岡山の要請を受けて宮島邸へ書丹の督促に行ったところ、「やっではいるのだが」と押入っぱいの草稿を見せられた。大久保は、宮島の熱意にうたれ、そのまま何も言えずに退出したという。大久保の逸話を裏付けるように、高木は、「何でも、宮島さんという方は、犬養公の碑ということで、書くのにずいぶん気を遣ったらしく、十ぺん通日も清書して、その中からいちばん良いのを選び出されたんだとか」³¹と久米の取材に答えていた。

前項に述べた通り、宮島と犬養とは特別に昵懇であったわけではなく、個人間の事情が書丹者選定に大き

く作用したとはいいいがたい。従って、宮島に拘りがあるとすれば、それは犬養の知己であるというよりもむしろ、憲政の神とまでうたわれた歴史的人物の顕彰碑を書丹することに対する思い入れであろう。しかし、それを理由として掲げるにしてもなお、《犬養公碑》の場合あまりにも執筆に時間を費やしすぎている。何ゆえにこれほどまでしてその書丹に精励しなければならなかったのであろうか。

2.2. 《犬養公碑》書丹の実情

《犬養公碑》の題額は、宮島が最初に研究古典として取り組んだ北魏楷書《張猛龍碑》の書法によって、厳正に書される。碑文の方は、北魏の流れをくむ唐代初期の楷書《九成宮醴泉銘》³²を下敷きにしていることが見てとられる。このように楷書で書作をするとき、多くの場合、行草体ほどには文字に大小の変化はつけない。ところが《犬養公碑》を一目すると、まず文字規格の変化が大変激しいことに気づかされる。画数の多い文字を大きめ、少ない文字を小さめに収めるのは一般的な調和の方法で、同碑も基本的にその法がとられているとはいえるものの、あたかも《集字聖教序》³³におけるがごとく、不釣り合いな変化で、極端に大字となったり小字となったりする。また、1行の大半が小字で終わっているところもあり、まさに久米が指摘した通り、「表現上の変化というより不自然なあり方」で終始する。久米はこれに不審を持ち、当初、「……詠士は、碑面大の紙に全文を揮毫するという方法をとらないで、小紙に何枚にもわたって書き継ぎしていったのではないか。そして、小紙ごとに、何枚かあるいは何十度か書いて推敲を重ねたあと清書を作り、最後に、各清書群の中から最良のものを選び出して、その一連をもって全文の清書としたのではないか」「……そして、碑刻の際、それを各行ごとに切り離して碑面に貼り、全文を構成したのではないか」という推論を立てた³⁴。実際に、山内が碑面へ短冊型の紙を貼っていたようであったことを、管理者の高木も久米に話していた。これは先の碑身の写真によっても確認することができる。同写真によれば、銘文、撰文者名等の部分は明らかに紙片であるし、本文部分もスライドで拡大投影すると、細い紙片を貼りつないでいる様子が見えてくる。書丹原稿が当初から紙片であったのか、作業の都合上裁断されたものであったのかはさておき、原本が最終的に紙片の形状を見せていたことは疑いない。では、この「紙片」は何をものがたるのだろうか。

善隣書院には2種類の《犬養公碑》草稿が残されている。一つはほぼ碑面の大きさの用紙に割り付けた草稿、いま一つは二番唐紙に8字詰め4行書きとした剪装本形式の草稿27頁分である³⁵。双方とも用紙に直接執筆するのではなく、文字入れをした約3.0cm幅の細長い紙片を台紙に貼りつける方法をとっている。台紙にはその目安として、色鉛筆で丹念に罫線が引かれ、またマスどりがされていた。行の中心線は青鉛筆で引かれ、これに赤鉛筆でマスどりをする。そのマスを、ときに青で十字に仕切ることもしている。文字入れをした紙片は、色鉛筆の線に沿って丁寧に貼り込まれていた。そしてこの紙片もまた、赤鉛筆でマスどりがされており、文字はその上に1字ずつ書かれている。それは周囲の罫に従って慎重に切り取られていた。

まず、碑面の体裁に仕上げられた草稿は、朱書した短い紙片を台紙に貼り足しながら1行分を収めている。行間になっている紙片と紙片との間隔は開きぎみで、実際に建碑された最終のものよりも全体に大きい。そのためか、完成後の全拓整本と比較すると散漫な印象を受ける。この草稿には欠落箇所が若干あり、完成後のものとは銘文や撰文者名の位置が異なる。また、書者、刻者名の部分はまだ書き込みがされていない。宮島はこの碑面形式の草稿によって全体を見定め、書丹の見当をつけたのだろうか。

いま一つの剪装本形式の草稿は、朱と墨の両方で書されている。最初の4頁分は朱書、5頁目からは墨書となっており、墨書の部分にはしばしば自らの手で朱による加筆や添削を行っている。ほんの僅かな点画の乱れにも小さな朱のあとを丹念に入れており、その様子は、何事もいい加減にすることを嫌ったという宮島の潔癖さをよく表している。文字の貼り込みも1行8文字の定形の用紙が用いられているのではない。多くの草稿の中から切り取り、選り抜いていたのか、小さな紙片のつぎはぎで1行の体裁は整えられていた。冒頭部分を例にとると、第1行は「故内閣」「総」「理」「大臣」「犬」の5枚、第2行には「養公」「碑」の2枚、合計7枚の紙片が用いられる。そしてそれぞれが台紙に引かれた罫線に従って、文字の配置が自然になるように配慮しながら貼りつけてあった。草稿とはいえ大変細やかな作業がなされて、これらに費やした時間だけでも少なからぬものだったであろうことが推察される。

書についていえば、文字の大きさは碑面形式、剪装本形式ともに、不安定で一貫していない。楷法の極則

と称される《九成宮醴泉銘》を髣髴させる書風でありながら、結構は整齊を逸脱し、一字一字の点画も放埒になりぎみで、垂直に引くべき縦の線がともすれば左へ左へと流れていく。丹念な加筆添削を行いながら、その正そうとした補筆さえ思うに任せない様子である。この草稿からは、《犬養公碑》に向かう宮島の必死の様子がひしひしと伝わってくるように思われた。

草稿群の中には多くの《九成宮醴泉銘》臨書紙片が含まれていた。これは、宮島が格調高く平正清明な《九成宮醴泉銘》を《犬養公碑》の書の基盤に置こうとしたことを表すものである。さらに、碑文草稿に混じって碑額の草稿も遺されていた。完成した碑額は《張猛龍碑》の書風を基調とした荘重な楷書によっている。それ以前に宮島が書丹した碑の題額も、《橋本君碑》《高橋景羽墓表》《墮涙之碑》等は、いずれも楷書で書した。しかし、この碑額草稿には楷書の他に篆書、隸書によるものがあつた。それを見ると、篆書、隸書は普段から書き慣れていない様子で、技法的にもまた線質的にも楷書草稿の生彩にははるかに及ばない。けれどもこの草稿の存在によって、最初から碑額の書体を楷書と限定するのではなく、さまざまに工夫を試みていたことが知られた。

かくたる苦心の末に、《犬養公碑》の書丹原本は完成した。この書は今、姻戚の高倉貞によって焼きつけられた青写真という形で目にすることができる。それによると、原本は剪装本形式の草稿とほぼ同じで、縦35cm強、横20cm弱の台紙上に、長さ31cm弱、幅2.7～3.5cmあまりの文字入れをした細長い紙片が行間をとって貼られている。1頁分に1行8文字4行書きという体裁も草稿と変わらない。先の碑身に貼り込まれていた紙片には、スライドで拡大投影すると8文字の文字を読み取ることができた。おそらくこの1行1行が切り離されて碑面に配置されたものだろう。

台紙に貼り込まれた紙片は1行分1枚からなっているのではない。1枚を書き通しているものもあるが、2、3文字、あるいは4、5文字を切り貼りして1行としていることが多く、ときには1文字を丁寧に切り取って挿入し、1行としてまとめている場合もある。台紙と文字入れをした紙片には、いずれも草稿を書いたときと同じく、行の中心と字間に罫線が引かれている。原本の書は、その罫に従い、中心線を注意深く見定めながら、入念に書き込まれていた。草稿の書と比較すると、原本の書きぶりは、線の練度、結構の緊張感等、すべてが洗練されて勝っている。しかし、碑文の原書としてこれを見たとき、

やはりそこに破綻は少なくない。

宮島は、書丹原本となる清書においても1行8文字を連続してまとめあげることができていなかった。やはりつぎはぎを余儀なくされ、長すぎるほどに右へ伸びた右払いや繞は、状況に応じて、その部分だけ紙片を長く凸型に切り延ばしている。起筆は鋒先を立てて静かに下筆し、点画の接合は確実にに行われて、文字の組み立てにも配慮の様子が窺われる。ところが、筆致は入念であるのに、書き上がった文字は、マスの中で左右に動き、上下に動いて安定していない。そして縦画は右へ左へと傾いている。文字の大きさも大小の差が激しく、原本の14枚目から16枚目にかけては全体が極端に小さい。《九成宮醴泉銘》を基調としながら、ここに見られる不統一感はどうしたことだろう。《墮涙之碑》や《佐藤氏念祖碑》等、それ以前の碑にはなかったことである。

さらに、この原本には2カ所の誤表記が見られる。まず、宮島は原本3頁目の第1行下部に「竹」と書いているが、ここは本来犬養の父である源左右衛門当濟の号「水莊」の「莊」が入るべきところである。いま一つの書き誤りは、原本7枚目の第2行上部で、「尚立朝専権。公辯詰其違憲……」と書くべきところを「尚立朝朝専権。辯詰其違憲……」として、「朝」を2字続け、「公」を脱している。後者は、草稿においては正しく書いており、前者は草稿においてすら誤っている。先に挙げた碑身の写真は、すでに原本を貼って刻するばかりの状態になっていた。そこで、これをスライド投影して熟視すると、「朝」「公」の方は碑の上部であるためぼやけて判読が不可能だったが、「竹」は誤字がそのまま貼り込まれている様子が読み取られた。実際に完成した碑面の文字はすべて正しく直されているので、刻する前に気づく人があったということになる。「水」は碑文中には他に使われていない文字であり、「公」も原本中に同形のものは見当たらないため、この2文字だけを宮島が新たに書き送った可能性もある。

完成した原本には、そのほかに、誤字とまではいかないものの、点画の長さが不足する等、不的確な表現が随所に見られる。年月を費やして周到に仕上げたはずの書であるのに、こうした初歩的なミスがあり、また、文字が不揃いで字形にもアンバランスなものが少なくない。これらの問題が生じたことには、以下のような事情が内包されていた。

書丹の依頼を受けたとき、宮島はすでに高齢だった。そして、草稿を練っている期間中に脳出血に見ま

われた。「詠翁道話」から病状の記録をたどると次のようになる。

<1939(昭和14)年10月7日>

朝八時半代々木お宅に参る。いつも直ぐ玄関に出迎えて下さる先生が今日は見えず、奥様がお出ましになって先生御病氣と聞いて驚く。お床はのべてあるが先生は平気で起きて居られる。拝診、病状大略左に、九月末から軽度の言語障害あり。当時血圧一七〇—一八〇ミリの間、先生本年七十三歳、遺伝的には厳父栗香先生脳出血症にて長逝(七十四歳)

自覚症状、右の側頭部に軽度の頭痛、口腔右側に唾液が溜まる感がある程度。

他覚症状、右顔面神経(下肢)麻痺あり、舌少しく右偏、四肢の運動障害なく知覚異常なし、腱反射は膝蓋、アキレス共に左側少々昂進、ババンスキー無し、握力並に下肢屈伸力は左右差異なし、握力並に下肢屈伸力は左右差異なし。

即ち軽度の半身不随症である。先生は椅子で話そうと云われるのを無理に寝ていただいて暫くお邪魔する。

<1939(昭和14)年11月11日>

早朝東京着、靖国神社参拝、直ぐに代々木へ参る。先生親しく玄関に迎えて下さる。

直ちに拝診。

軽度の言語障害残存、右側鼻唇溝少々浅、舌尖僅に右偏、左下肢腱反射著しく亢進、血圧一六二—一八〇ミリ。

総じて一月前と比較してよほど好転。

<1940(昭和15)年1月13、4日>

朝参邸。先生着袴お出迎え下さる。暖炉の音楽しい広縁で皆様に新年の御挨拶をしてから拝診。

軽度の言語障害残存、舌端偏せず、顔面神経麻痺亦治癒、腱反射は左脚少々亢進。

<1940(昭和15)年3月27—31日>

先生前回より稍御肥満、色沢佳良。拝診するに言語障害微かに残存せるのみ。近頃は時々散歩される由。

<1940(昭和15)年7月6、7日>

六日朝参邸。拝診。脳出血後遺症状全く消失、慶賀申し上ぐ。……先生は脳出血御禁酒をして居られたが、この春頃から一二杯位口にされる。今日も三四杯召し上った。近頃は酒を嚙んで味わいますが又格別ですねと云われる。

執筆者である富永は医師であるだけにこの記述には信頼が持たれる。富永によると発症して9カ月あまり後に症状が消失したという。しかし、原本の作成はさらに遅れた。治癒したとき、宮島は74歳となっていた。回復をしたとはいうものの、この発病が宮島の体力の低下や感覚の衰えを著しいものにしたことは十分に考えられる。宮島には、頭に思い描いた書を、思い描いたままに表現することが、すでにできなくなっていたのではないか。

これらの状況により、原本作成の遅れは作品揮毫に対する宮島の気質から、また書した文字の不備は上記の事情すなわち高齢且つ病気による体力と表現力の衰えからきたもの、と考察することが可能となった。しかし、さらに追求すれば、発病は書丹依頼から3年あまりを経た後のことである。それまですでに草稿をつくりながら、なぜ宮島はそれを自ら完成と認め得なかったのだろうか。

3. 宮島大八の書法理念

3.1. 《佐藤氏念祖碑》の書法理念

宮島は《犬養公碑》撰文の5年前に《佐藤氏念祖碑》を書丹している。《佐藤氏念祖碑》とは、源平合戦の際に源義経の身代わりとなって壇ノ浦で戦死した佐藤継信を頌え、三十世孫の佐藤信古が建立したもので、碑は香川県香川市牟礼町(旧香川県木田郡牟礼町)内の佐藤継信墓地に現存する。1931(昭和6)年5月、佐藤は古くからこの地にあった継信の墓所に大修築を加え、746㎡の墓地公園とした³⁶。同碑は堅牢な伊予石を用いた巨碑であり、公園の中央奥に配置される。碑の周囲は柵に囲まれて、一定距離以上は近づくことができない。碑文の文字規格は《犬養公碑》よりも大きく、その彫り方も幾分深い。何より摩滅が殆どないと言っていいほど少ないため、鑑賞が容易である。

さて、この《佐藤氏念祖碑》を、宮島はどのように書したのだろうか。《犬養公碑》執筆と何らかの関連はあるのだろうか。これをはかる資料として、建碑者である佐藤信古に宛てた宮島の書簡草稿と碑文草稿とが善隣書

院に収蔵されている。草稿は二番唐紙24枚に書され、1枚目に書簡草稿が、続いて碑文草稿が順に重ねられ、右端は紙縫で簡便に綴じてある。この草稿から書丹期間と書丹意図を読み取ってみよう。

草稿に用いた二番唐紙は、縦28.5cm×横30.5cmのほぼ正方形で、黄ばみが強く、いずれも朱罫が刷り込まれている。5枚目の用紙のみが赤に近い罫で、縦2.2cm、横2.4cmのマスにより、1列12マス12行、144文字分の罫と、左下に「屯鎮老胡開文」の文字が刷られ、その他の用紙にはすべて3.2cm角のマスで、1列8マス8行、64文字分の罫が印刷される。

1枚目の書簡草稿には朱筆により次の内容が記されている。

拝啓 先日来毎度枉駕奉謝候 偕 念祖碑 愈
本日より着手 大抵予定期限内二間に合候事
ト存候 承レバ候補者、有之候 又 万一之際
を予想致て大ニ心強相成候 先ハ右要事迄
匆々 如此候 頓首

十一月卅日

宮島大八

佐藤信古様

文面には、本日(11月30日)より原稿執筆に取りかかること、予定期限内に間に合うであろうことが書き込まれる。文中の「候補者」については、刻者に関することかと思われるが、これのみでは理解しにくい。また、ここにいう「本日」にあたる年号は、続いて綴じ込まれた碑文草稿の最終頁に、「五年十二月二日私曉底書畢」と記されているところから、昭和5年、つまり1930年であることが特定される。一方、建立後の碑面に刻されている撰文年には「昭和六年五月」とあり、ちょうど継信墓地修築完了の時期にあたる。「予定期限内に」と宮島が記したのは、それに合わせて書き上げるとの意であろう。撰文年月の通りに考えると、時間の猶予は約半年となる。刻字に要する日数を差し引けば、書丹原本は相当早く書き上げねばならないことになる。果たして実情はどうであったろうか。

11月30日に書翰をしたためののち、宮島は早速草稿づくりに取りかかった。使用した二番唐紙には、3.2cm角の朱のマスが入っている。のちに宮島は、「習字に最も適当な文字の大きさは一寸角ぐらいである。それは大字にも小字にも通ずるものである³⁷」と語っており、それは宮島にとって使いやすい理想的な用紙だっ

たといえよう。用墨には通常の墨ではなく、朱墨を選んだ。しかも、文字の輪郭の周囲に薄い滲みを広がらせる独得の表現によって書いている。これは張裕釗から得た技法であった。

1枚目は、第1行に1マス1字ずつ、まず「佐藤氏念祖碑」と書いている。鋒先を内に蔵し、払いの先まで筆を抜かないで静かに留め置く表現は、張裕釗そのものである。転折部やハネには外方内円という張裕釗独得の技法が取り入れられる。それはマスの規格を使い切った堂々たる書きぶりであり、宮島の制作意欲の高揚をあらわしているかのように見受けられる。2行目に移り、更に碑文を続けて書く。4行目からは少し文字規格が小さくなり、関連のない文字を、同じく張裕釗書法により、静かにゆったりと書き進めている。

2枚目は、同じく張裕釗の書法により、最初の4行分をマスの中ではなく野上に書いており、語句は碑文からとったものをまずアランダムに並べ、途中から随意の文字としている。5行目はマスを目安にしながらも、それをはみ出る大きさで、右払い、左払い等、文字の手足を大きく左右に延ばした姿の文字を置く。6行目は2行分のスペースを使って、やはり思いつくままの語句を羅列する。5、6行目は宮島独自の造形によって書いている。

3枚目は、4マス分のスペースに1文字を置き、碑文冒頭部分を大きく収める。これは最初に朱書し、その上に墨書を重ねている。文字の造形は、先と同じく胴体部分を引き絞り、左右への点画を長く出して、宮島自身の書法を強調している。

4枚目は、1行12文字というマス目の多い用紙に、碑文8行を忽卒に書く。これは草稿というより心覚えのメモとして書いたようで、書法上の配慮は窺われない。1枚目の途中からこの4枚目がいわば準備段階で、いよいよ次からは一貫した張裕釗書法により、碑文が書き通される。

5枚目は、少し小ぶりの文字により、マス目内に文言を調和よく書き入れる。6枚目は野を中心線に見立て、払い等の横への画を強調してのびやかに書き、7枚目から23枚目の最後までは再びマス目内に整然と収めている。この間、目立った書き損じは殆どなく、安定した筆致で終始している。また、21枚目と22枚目のみマス目内に鉛筆で十字を引き、のちに消した跡が見える。

張裕釗の筆法は、基本的に横画をまっすぐに書き、線の中心に鋒先を通して緩やかなリズムにより運筆する。この書法によれば、草稿を書くために、宮島はどれほどの時間を費やすことになっただろう。筆者は試みに

1枚64文字を宮島による張裕釗の筆法に倣って書してみた。するとこれに約30分を要した。勿論、宮島の執筆を想像して行った筆写であり、正確なものとはいえないが、ひとつの目安として単純計算をすると、はじめの準備部分を含め、草稿の全体を書き上げるために、宮島は約10時間を費やしたのではないかと思われる。草稿末尾の記録によれば12月2日の明け方に書き終えたとしているので、11月30日から始めて丸2日間で仕上げたことになる。集中した執筆状況であったことが想像される。

さて、仮に12月末に書丹原本が完成したとしよう。刻了は撰文年月の1931(昭和11)年5月に間に合うだろうか。《佐藤氏念祖碑》の碑文は1,171文字あり、前述の通り、その文字規格はやや大きい。宮島の碑刻への拘りは知られていて、同碑の場合は木村嘉市がこれを行っている。宮島の草稿にすでに木村の名が記されており、当初からそれが決まっていたことが理解される。その刻字作業の進行ペースは上記の通り1日精々4、5文字だったというから、機械的に考えれば立碑までに最低約9カ月を要することになる。通常であれば、とても5月という撰文月に間に合うものではない。しかし、同碑については複数の職人がこれを担当していたことが伝えられ³⁸、木村の指揮により数カ所を同時に刻す形で作業が進められたことが想定される。その鐫刻に対する宮島の注文は厳しかったといい、また、一気に草稿を書き上げた気迫等をも考え合わせると、宮島の同碑への意気込みが強かったことが想像される。

こうして、《佐藤氏念祖碑》は完成した。刻了後の拓本が、いま善隣書院に伝えられる。それを見ると、張裕釗書法で書き通した草稿と比べれば、書丹されたものは《九成宮醴泉銘》の造型と線質が加味されて、宮島自身の個性がかなり強く含まれる。しかし、篆法を用いた潤いある外方内円の書法もまたごく自然に表れて、悠々とした裕釗の風格が横溢している。宮島は、自己を生かしながらも師法を遵守した書風により《佐藤氏念祖碑》を書丹したのであった【図6】。

碑の書は不特定多数の目に触れ、また後世に残るものであるところから、書者はやはりそれを意識して書丹に尽力するのが常であろう。宮島もまた、それまでも碑文の書丹にはいずれも人一倍の誠意を持って書いている。就中、《佐藤氏念祖碑》は渾身の作となった。宮島はおおいに自負を持っていた様子で、当時宮島に書を学んでいた海軍将校が手本揮毫を依頼

したところ、「手本は書かない。そのかわり讃岐の牟礼に小生が精魂かたむけて書いた佐藤氏念祖碑があるからそれを習ってもらいたい」と答えている³⁹。将校は自ら香川県庁へ出向いて拓本依頼をし、香川県知事から香川県師範学校の習字教員藤原鶴来へ委託がなされた。そうして後に将校はようやく拓本を入手することができたという⁴⁰。

《佐藤氏念祖碑》は、65歳の宮島にとって、人生における学書の到達点を示すものであった。師張裕釗の法は宮島の中に咀嚼され融合されて、そこにひとつの完結した姿をあらわした。宮島は自信に溢れていた。《犬養公碑》の書丹年は、その5年後となる。では、《犬養公碑》に対し、宮島は《佐藤氏念祖碑》以降のどのような理念を投影させようとしたのだろう。宮島の精神のありようは、晩年に至ってどこへ行きつこうとしたのであろうか。

3.2. 《犬養公碑》の書法理念

張裕釗の書法が色濃くあらわれた《佐藤氏念祖碑》から一転し、《犬養公碑》にその風は表だつてはあらわれてはいない。題額の書は《張猛龍碑》、本文は《九成宮醴泉銘》を基調とする。いずれも張裕釗が習い、宮島が授けられた古典ではあるが、その表現は瘦勁で縦長かつ右上がりの造形であり、基本的スタイル自体が裕釗の書法とは異なっている。

宮島は《犬養公碑》の執筆にあたり、前述の如く、草稿づくりと同時に《九成宮醴泉銘》の丹念な臨書を繰り返していた。その草稿は欧陽詢書法で一貫し、張裕釗独得の表現は殆ど見られない。宮島は《九成宮醴泉銘》への拘りによって、何を主張しようとしたのだろう。

かつて宮島が書法の究明において最も苦悩したのは、張裕釗のいう中鋒の真髄を得ることであった。中鋒への執心は中国留学から帰国した後も長く続き、その本義に到達するのは明治末年、宮島46歳の頃であったという⁴¹。中鋒の本義について、魚住和晃は、「廉卿、詠士に通ずる漲墨沈光の点画と、それを包む薄く溢れるばかりのにじみに物語られるもの⁴²」とする。中鋒から生まれ出る筆力は、紙背に透る強さとともに深い含蓄を伴っている。《佐藤氏念祖碑》の朱墨草稿の場合にも、二番唐紙の全体が覆われるほどの薄いにじみが充満する中を、くつきりと文字は書き上げてあった。

中鋒を会得した後、宮島の書は大きく独自の世界を開いていく。魚住は上に続けてさらに、「伸びきった左右の払い」は詠士生来の文字造形で、これに中鋒の筆

力が加わることにより、雄渾無比の筆力が展開された」とする。宮島は張裕釗の筆法の入手により、独自の書法を構築し得たという点は疑いないが、張裕釗との邂逅だけがその条件を満たした訳ではなかった。魚住の指摘通り、宮島は生来の造形感覚を持っていた。宮島がまだ張裕釗に出会う以前、1898(明治21)年9月21日北京発信の誠一郎宛書簡に書かれた筆致はきわめて精悍で、魚住はこれを、「この造形性は五十代の、詠士書法のもっとも盛んなときの筆致に直結するものである⁴³」と評価している。つまり、宮島には天性の表現力があり、張裕釗に勝るとも劣らない資質を備えていたのである。そして、宮島は自己の能力に対して強い自信を持っていた。1940(昭和15)年1月、宮島を訪ねた富永は、次の記録を残している。

一月十四日朝九時宮島邸へ。皇甫府君碑臨書と左の書を頂戴した。何れも朱文。

好漢自愛 顔欧重出必与於我言

庚辰正月 七十四翁 詠士^印

顔真卿、欧陽詢が今もし此世に再生したならば屹度わたしの言を認めるであろうとの意で書道に対する御自信の程が伺える強い言葉である⁴⁴。

上記の文言を書したのは、宮島が《犬養公碑》書丹原本を未だ制作中であり、また病氣療養をしている時期にあたる。同碑の執筆のために、宮島は欧陽詢の作である《九成宮醴泉銘》の臨書を行っていた。では、宮島自身は欧陽詢書をどのように捉えていたのであろうか。富永はこれについて、次のように書き留めている。

今日は携行した九成宮に就いて主として文字の結構のお話を伺った。今日まで私は運筆さえ法に副えば字の形など余り問題でないと思っていたので、その非を懇々と諭された。欧陽詢の書は楷書の極地であるから、一点一画忠実にその結構を学ぶべきを力説された⁴⁵。

六朝や唐の書はみな中鋒で書かれているから、顔真卿や褚遂良などみな手本として結構であるが、欧陽詢の九成宮が皇甫府君を繰返し臨するがよい。殊に九成宮は運筆結構兼備の傑作である⁴⁶。

宮島が張裕釗を通り抜け、最後に行きつき、そして求めた究極の境涯は、欧陽詢書、わけても《九成宮醴

泉銘》だった⁴⁷。《佐藤氏念祖碑》により自らの到達点を示した宮島が、その上にさらに築こうとしたのは、師法とともに在ることではなく、自己の書法理念により自己の書法をあらわすことであり、それは《九成宮醴泉銘》を基軸として展開するものであった。前出の高木は、犬養の碑ということで宮島が気を遣ったとするが、犬養個人への至誠というよりも、自らの一生を飾ることになるであろう比類なき碑の書丹を、至り得た自己の書法、すなわち自己の世界観でものすという強烈な自我、これに対する拘りが宮島を奮い立たせていた。それはまた、自己を思い通りに書きあらわす表現力と体力がすでに失われていたこととのすさまじいばかりの闘いでもあった。宮島は残されたすべての力をふりしぼるかの如く碑文に向かい、そして、書法においてはついに張裕釗の境地を乗り越えた。《佐藤氏念祖碑》の中ではごく自然に滲み出ていた師法が、《犬養公碑》においてはすっかり払拭され、就中、古雅な趣を持つ独得の楷法としてその姿をあらわしたのである。しかしながら、同時にそれは張裕釗に初めて対面したときに与えられた箴言である「攻苦」の精神をまさしく忠実に貫いたものにほかならなかった。

かくして《犬養公碑》は書き上がった。宮島74歳、死去の2年前であった。

おわりに

犬養毅の頌徳碑であるところから《犬養公碑》は注目され、知名度が高い。書した人物が隠者の如き宮島であったことも、碑の評価に繋がったかもしれない。宮島の書丹した他碑について、書道人の多くはその存在をよく認知していない。そして、伝聞のみにより、《犬養公碑》を張裕釗書法として位置づけた。しかし、本稿で論じた通り、《犬養公碑》は断じて裕釗直伝の書ではない。

宮島は最後の碑文書丹に際し、張裕釗への追従をことごとく振り捨て、裕釗を突過した後の自分の姿を明確に打ち立てようとした。宮島の持つ天性の素質は、長年月にわたる研鑽の中で、独自の書法理念を生みだすところまで高められていた。中途における軽微の脳出血は造形感覚、運筆のコントロールに従来との差異を生じさせたが、それは結果的に新たな独自の風格を導くことにも繋がった。そこには、それまでのもっぱら伸張性を擅にしていた筆致から、「拙」を内蔵する渾穆の境地への到達があった。

1942(昭和17)年4月、《犬養公碑》書丹原本の作成後に、宮島は次のことばを富永に伝えている。

張廉卿先生はよく「振俗」ということを言われた。これは俗気を根こそぎ洗い落とさなければ本当の人間は出来ぬということである。習字でも全くこの二字が大切である⁴⁸。

宮島は生涯、張裕釗を尊敬し、敬愛した。裕釗より学び得た学書法はすでに宮島自身のものとなっており、「攻苦」により「振俗」へ至り得ることは自身が望む姿でもあった。さらに宮島にとって、「振俗」とはすなわち師張裕釗からの脱却をあらわした。そして、それを《犬養公碑》に具現化しようとした。

宮島は執筆が思うに任せなかった。これ以前の碑の書丹はいずれも堂々たる書きぶりを見せるものであったし、最も近い作である《佐藤氏念祖碑》に関しては、はっきりと言葉にあらわすほどの自負を持っていた。その記憶が明確であればなおさらに、自らの筆写技量がかつてとは異なることを客観的に把握することができよう。しかし、宮島は一切を忌避することなく精魂込めてこれを書き上げた。その心のありようには何が存していたかという、まず、「自らを見つめ、自らのために書する」との信念があろう。さらに、基盤とする意識の中に、欧陽詢、顔真卿と自身とを重ね合わせる程の余裕があったのを思い起こすとき、技量の如何はその価値基準から全くはずれるものであることが理解される。つまり、宮島は師裕釗をこえ、さらに高次の自己実現のために、納得のいくまで書したかった。単に理念というに留まらず、書という形の中にそれをあらわしたかったのである。そして、それをやりおとした。では、何を拠り所として宮島は「自らを見つめ」、より高い自己実現を求めようとしたのだろうか。

至誠、すなわちこの上なく誠実であることは、宮島が生涯において信条としたところであり、その人生は自分に対しても、また他に対しても清廉潔白を貫くものであった。最晩年において、《犬養公碑》を前に推敲を重ねたのは、まず紛れもなく自分に対する至誠であろう。と同時に、それは師裕釗に対する、そして同碑に関わるすべてのものに対する至誠であった。宮島晩年の書作に、《大慈悲》と書した幅がある。仏の持つ広大無辺の慈悲心は世上のすべてを覆うものであり、宮島はこのときすでにそういった精神領域にまで到達していたとはいえないか。宮島にとって、《犬養公碑》書丹による師法からの脱却は、「振俗」に至ることであったが、それはまた真性普遍の世界を開く

ものでもあった。《犬養公碑》は独得の風韻、風格を漂わせ、超然たる境地を現出している。こうした、おおよそ人為ではあらわしがたいものをあらわし得たところに、《犬養公碑》の書的意義と宮島大八晩節の真価はある。

本稿の執筆にあたり、善隣書院院長宮島吉亮氏より伝蔵の資料を御供与賜った。厚く御礼申し上げる。

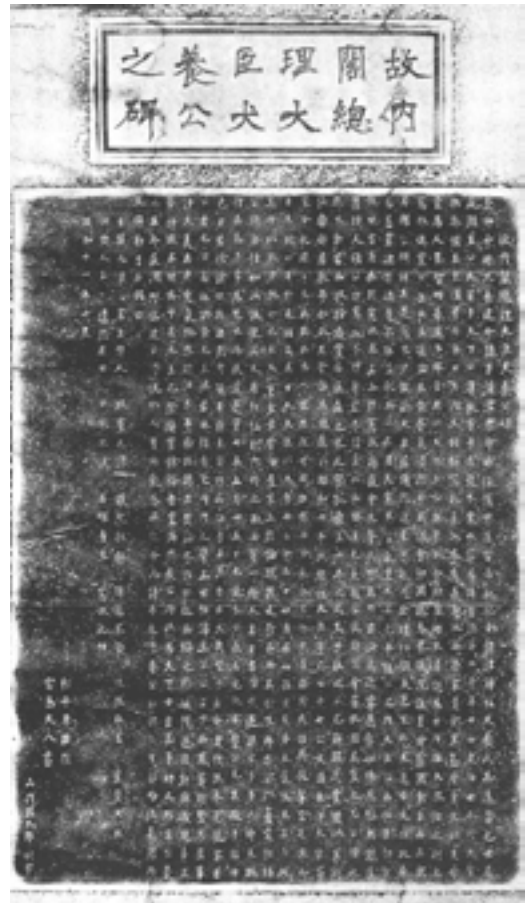


図2 《犬養公碑》拓影(整本)



図1 《犬養公碑》全景

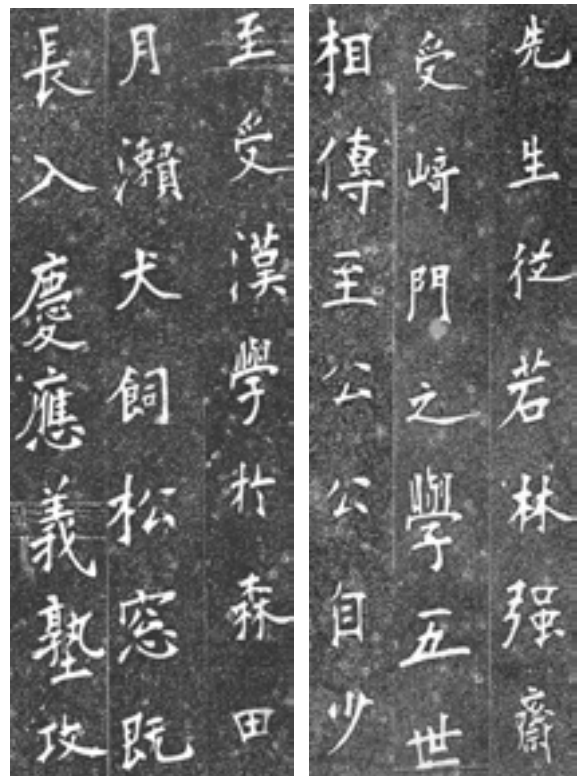


図3(左) 《犬養公碑》拓影(剪装本・部分)

図4(右) 同上

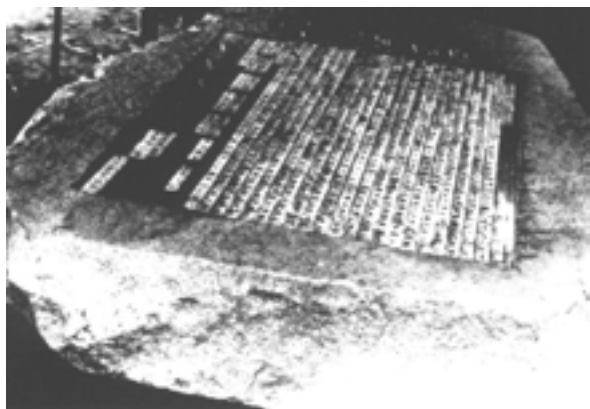


図5 《犬養公碑》碑石(刻字前)



図6 《佐藤氏念祖碑》拓影(剪装本・部分)

図版出典

図 1 1999年8月執筆者撮影。

図 2-6 善隣書院收藏。

注

- 1 張裕釗(1823～1894)は号を濂亭、字を廉卿とする。裕釗は諱。湖北武昌の人。1846(道光26)年の挙人。1850(道光30)年に国子監学正学録に及第して曾国藩の知遇を得る。その後文学に励んで「曾門四弟子」に数えられ、晩清を代表する古文家となる。40歳を過ぎてから書法にも邁進して独自の世界を開き、「外方内円」による独創的な楷書体を確立する。(参考:図録『近代日中書法交流史を担った人々』財団法人徳島県文化振興財団徳島県立文学書道館、2005年、122頁。)
- 2 『書道全集』第25巻、平凡社、1957年、154頁。
- 3 信廣友江「《故内閣総理大臣犬養公之碑》の書丹過程」『安田女子大学紀要』第27号、安田女子大学、1999年、87-103頁。
- 4 碑石の寸法は取拓を行った久米公の報告による。久米東邨(公)「野の書研究(6)」『耕心』第196号、耕心書道会、1968年、3-8頁。なお、碑額および撰文の内容は以下の通り(『犬養公碑』岡山県郷土文化財団、1982年)。

故内閣総理大臣犬養公之碑(碑額)

崇神帝時、犬養建命、随吉備津彦命、西征備中、遂留焉、配祀吉備津神社。犬養氏其遠裔也。世居庭瀬、至公大著于天下。公諱毅、字子遠、号木堂。水莊君諱当濟第二子。年十四喪怙。母小川氏、賢撫教備至。受漢学於森田月瀬・犬飼松窓、既長入慶応義塾攻西学。家貧飢寒勤苦、売文以充学資。為人有智略、豪邁不群、自期以天下士。初執筆報知新聞、雄文卓説、為世所称。大隈伯之創立憲政進党、公往投焉、議論風発、声氣凜然。帝国議會初開、選為衆議院議員。時藩閥勳臣、尚立朝專權。公弁詰其違憲、不少假。諸大臣莅議院、適見公起而登壇、相顧失色、不覺太息云。是以政府忌甚、窘迫百端、竟不能屈。既而公在国民党、衆望益重。大正元年、桂公從内大臣出而任首相。公慨曰、宮府無別、憲政危矣。立作憲政擁護会、大声疾呼、鼓吹国論、遠近響応、勢如燎原、桂内閣遂罷。時人頌公曰、憲政之神。声望之隆、至此而極矣。先是、桂公設同志会。羅致国民党之尤。公獨屹然不動、留而收拾殘党、率区区之衆、死守孤壘、至十年之久。天下壯之。公已解国民党、繼以革新俱樂部。居數年、合政友会、推為總裁。以昭和六年、任總理大臣。年已七十七。公夙講東洋大計、窃策合従。謂日支両国俱為一体、然後可聯諸邦而合之。但支那分崩離析、我誰与提挈。宜先使之自成統一耳。於是結交其士大夫、説以大勢。而亡命志士、如康・梁、如孫・黃、皆善庇護、使成其志。此其所以仮力統一也。公又重産業、嘗唱産業立国論、明国是所存。而其於支那亦欲以産業相結。公所自任如此。誠使其久居相位、則内外之政、必有一新人耳

目者。惜哉、遇国家多事之時、未暇行其志、不幸為兇刃所戕遽薨。実七年五月十五日也。是日公燕居、兇徒来襲。公見其擬手鎗、神色自若、徐諭曰、与語則可曉耳。辞氣安舒、如語子弟然。自古大臣斃于非命者何限。未見從容若公者也。公高祖訥齋先生、從若林強齋、受崎門之学、五世相伝至公。公自少尚風節、剛堅不屈、事涉大義名分、意氣慨然。明治末年、南北朝正閏論之作、公起而弁之於議院、遂能動廟議。晚喜王学、神識高明。嗚呼、其死生之際、綽有余裕者、豈偶然哉。公所以為天下士、自在事功之外矣。公薨之五年、庭瀬町謀建公碑使郷人有所觀感興起、介人請予文。予辱公知、誼不可辞。略叙見聞所及、俾勒于石。銘曰、

吉備之國 篤生偉人 政党之傑 議院拔群 踔厲風發 侃侃厥言 翼贊大猷 位極人臣 遺烈在世 千秋不泯 名輝青史 憲政之神

昭和十一年十月

松平康国 撰

宮島大八 書

山内国太郎 刻字

- 5 魚住和晃『宮島詠士[人と芸術]』二玄社、1990年、121-123頁。
- 6 北魏、522(正光3)年の刻。魯郡太守張猛龍の頌德碑。北碑の特質である左放右収の造型により直線的で骨力ある表現がなされる。北魏楷書の代表的作品。
- 7 富永寛「詠翁道話」『素描——人と画と——』青泉社、1969年、3頁。「詠翁道話」は、兵庫県芦屋市の医師富永による宮島との接見録。1936年4月5日に入門してより、1943年7月9日の宮島死去までの総計26回にわたる接見の記録がまとめられている。この1936年4月5日の項に、「張廉卿先生(宮島先生の恩師)は初め歐陽詢を学び、次いで米芾を習い、最後に古法——張猛龍——に入られた」とある。
- 8 1894年、張裕釗の死去にあたり、長子沆、次子澹によって発せられた死亡報告書。
- 9 宮島の門弟鈴木吉武の評。鈴木は宮島死去の際の追悼文に、「——先生五十歳以後は歐陽詢、顔真卿をもって肉とし、独自の骨格雄健、結構整正、極めて気品に富んだ書を完成して……」と記している(前掲「詠翁道話」、2頁)。
- 10 犬養毅の功績を顕彰し、1993(平成5)年、岡山市川入の犬養旧宅に隣接して開館した。岡山県郷土文化財団により運営される。
- 11 犬養木堂「局外観」『六朝書道論』中村不折・井土靈山共訳、二松堂書店、1914年、222頁。『六朝書道論』は清・康有為の撰による『広芸舟双楫』を翻訳したもの。巻末に、「六名家書談」として、中林梧竹、中根半嶺、日下部鳴鶴、前田黙鳳、内藤湖南、犬養木堂の書論を収録する。「局外観」はそのうちのひとつ。
- 12 交詢社の依頼により犬養が書道講話を行ったものを後に修訂刊行した。博文堂、1916年、全4巻。巻1 書談付跋尾、巻2 紙談付印章、巻3 硯談、巻4 墨談、付録篠本二郎硯説。
- 13 『書道』第1巻第2号、泰東書道院、1932年、1-7頁。
- 14 清末の遺臣。福建閩侯の人。1924年、宣統帝の教育にあたる。のち満州国國務総理となる。犬養との親交が厚かった。1860~1938。
- 15 清末の政治家。広東南海の人。戊戌新政を推進して失敗し、日本に亡命した。亡命後も清朝擁護による立憲君主を主張して孫文の革命運動と対立した。学者としても知られる。1858~1927。
- 16 康有為の撰。全6巻。1889年脱稿、1893年刊行。包世臣が碑学を唱えた『芸舟双楫』の論をさらに進め、帖学を否定し、碑版の拓による学書を推賞した。
- 17 『広芸舟双楫』体変第四に、「今学者、北碑漢篆也。所得以碑為主。凡鄧石如張廉卿等、是也(今学なる者は、北碑・漢篆なり。得る所は碑を以て主と為す。凡そ鄧石如・張廉卿等、是れなり。)」とし、今学は北碑と漢代篆書の学であって、碑による習得を主とすることを述べている。
- 18 魚住和晃『張廉卿の書法と碑学』研文出版、2002年、66-67頁。
- 19 注17参照。
- 20 注11参照。犬養は「局外観」の中で、張裕釗(張廉卿)について、「支那で近世六朝派の名家と云はるゝ人々を見るに、何れも皆近体(唐以後の書風)にて十分運筆を鍛錬した上で、初めて六朝に入る者にて、百家に出入し以て自家の法門を開くのである、例へば張廉卿の如きは其最も著しきものである」と述べている(前掲『六朝書道論』、222頁)。
- 21 注7参照。
- 22 前掲「詠翁道話」、55-56頁。
- 23 『書論』第23号、書論研究会、1984年、216頁。
- 24 前掲『書道全集』、154頁。
- 25 前掲「詠翁道話」、28頁。
- 26 前掲「野の書研究(6)」。久米公「詠士書丹二碑考」、前掲『書論』第23号、147-157頁。
- 27 前掲『書論』152頁に、佐々木開庵「佐藤氏念祖碑」(『書源』第2巻第8号、璞社)の一文を挙げ、同碑の刻字に対する宮島の指示が厳しく、建碑当時を記憶している石屋が「この刻りは注文がやかましゅうて、腕っこきの△△や××等○人で刻ったが、一日に四、五字しか刻れなんだワ…」と話したことを記す。
- 28 前掲「詠翁道話」、27-28頁。1938(昭和13)年4月4、5日の項。
- 29 同上。なお、文中の岩井氏は依頼者のひとり。
- 30 前掲「野の書研究(6)」、6頁。
- 31 同上。
- 32 唐、632(貞観6)年の刻。唐太宗の勅命によって書された。文字の結構は整然とし、用筆は洗練されて、古来「楷法の極則」と推賞される。
- 33 672年の刻。唐僧懷仁が内府に伝わる王羲之の書から集字した行書碑。完成までに20数年を費やしたとする。集字であるため文字規格の差が大きく、気脈が不通であるのはやむを得ない。西安の碑林博物館に現存する。
- 34 前掲『書論』第23号、153頁。

- 35 剪装本形式の草稿については、2006年、米沢市上杉博物館にその一部が寄贈された。
- 36 牟礼町史編集委員会編『牟礼町史』牟礼町、1993年、796頁。
- 37 前掲『詠翁道話』、4頁。1931(昭和11)年4月5日の項。
- 38 注27参照。
- 39 前掲『牟礼町史』、796頁。
- 40 同上。および、前掲「野の書研究(6)」8頁所収、佐々木開庵「佐藤氏念祖碑」(『書源』第2巻第8号、璞社)。
- 41 魚住和晃「宮島詠士における書法思想」『宮島家三代』米沢市上杉博物館、2005年、62頁。
- 42 同上。
- 43 魚住和晃「宮島詠士の留学書簡」『墨』164号、芸術新聞社、2003年、125頁。
- 44 前掲「詠翁道話」、55頁。
- 45 同上、32頁。
- 46 同上、57-58頁。
- 47 魚住は「書法は廉卿を突過して盛唐の顔真卿に近づき、あるいは北碑への傾倒を経て、究極の境涯を王羲之、さらに初唐の欧陽詢に求めていった」とする。前掲「宮島詠士における書法思想」、62頁。
- 48 前掲「詠翁道話」、82頁。

■執筆者について

信廣友江(のぶひろ・ともえ)

広島県広島市に生まれる。安田女子大学文学部卒業。神戸大学大学院総合人間科学研究科博士前期課程修了。現在、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程在籍。安田女子大学助教授。書法文化・書法教育専攻。共著に『書学挙要』藝文書院、2001年、『茶掛を読む(弐)』講談社、1997年等。

E-mail: nobuhiro@yasuda-u.ac.jp

■Notes on the Contributor

Tomoe Nobuhiro is Associate Professor in Calligraphy at the Department of Japanese Literature, Yasuda Women's University. She earned her BA at Yasuda Women's University and her MA at Kobe University, and co-authored two books: *A Collection of Papers on Japanese Calligraphy*, Geibun Publishers, 2001, and *Reading Japanese Tearoom Scrolls (part2)*, Kodansha Publishing, 1997. She is also completing her PhD dissertation on Calligraphy Culture and Education at the Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University.